

2019 年 3 月 30 日発行 編集・発行:多摩大学 〒 206-0022 東京都多摩市聖ヶ丘 4-1-1 TEL:042-337-1111 FAX:042-337-7103 https://www.tama.ac.jp/ 通巻 26 号

# 新たな門出、大学という変化の場

#### 経営情報学部 4年 岩大路 三貴

2015年冬、センター試験も一般入試も芳しくない結果の高校三年の男子生徒がいました。私、岩大路三貴です。塾にも行き懸命に受験勉強をしていたつもりでしたが、どれも失敗。私はとにかく高校までの勉強が面白いと感じず、まったく勉強に力を入れることができなかったため大学受験はうまくいきませんでした。勉強が好きであろうとなかろうと頑張らねばいけないものというのは重々承知していましたが、どうしても身が入りませんでした。どうして勉強が嫌いだったのか。型にはめて答えを求めるのが苦手だったのか、複雑で高度になっていく勉学についていけなかったのか、それは正直今でもわかりません。

そんな中、勧められた多摩大学。私はAO入試を受け無事合格し、この大学に通うことに。そしてそこでの四年間が、私の人生を大きく変化させていくことになりました。

入学当初、また勉強ができずに落ちこぼれて終わっていくだろうと 私は思っていましたがその思い込みはすぐに改めさせられました。

入学して早々にわかったのは、大学というのは社会に出る直前の学び舎ということもあり、それまでの学業とは大きく異なる点があるということでした。それまでの勉強のような、やり方と答えが決まっているものではなく、自分で幾多もの道筋を考えより良いと思う答えを生み出す力を養う場が大学という場所でした。私は授業を受けていくにつれそのことを知り、徐々に自分だけの答えを考えることの面白さに気づき授業にのめりこんでいきました。

一年生のプレゼミでは地元の活性化を題材に、周辺を探索。どうして過疎化が進んでいるのか、活性化させるにはもっとお年寄り目線になるべきなのか、それとも都市化させるべきかなど、各々の意見をグループで話し合い、お互いを高めていきました。ゼミに入ってより本格的に自分の学びたい分野の勉強を開始した二年生では、興味のある業界について正しい方法で正しい情報を集めながら問題点を発見。そこから自分なりの改善案を考案、プレゼンを行いゼミ生および先生から評価やアドバイスを行うという活動をしました。私はアニメ業界およびアニメーターについて調べ、待遇問題点の洗い出しとその改善をするためにはどうしたら良いかを考えました。アニメーターはあまり良いと言える待遇ではないためやめる人が多いという状況があること、それを改善するためにはもっとアニメ業界のことを認知してもらい世間を味方にするのが良いと思い、大々的にテレビや雑誌で仕事内容を公開して世の中に訴えかけるのが良いのではないかという答えを出し

ました。周りからの評価は、問題の重要性とそれを認知させる必要性はよく理解できたが、テレビ等で大々的にできるのか?といった意見を頂きました。三年生ではインターンシップでケーブルテレビ局に行き、こうしたらインパクトのある撮り方ができるとか、この編集と演出の方が伝わりやすいだろうといった意見をぶつけ合い、一つの映像作品を作り上げました。そして四年生になり、今までの学んできたことを活用して自分が社会に出た暁にはどんなことをしたいか、どうしたいかを具体的に決めて就活に挑みました。私の場合は、人の日常の支えとなるものを作ることに携わりたいという思いで会社選びを行いました。

多摩大学・経営情報学部という学部ゆえ、ビジネスにおける様々なアプローチの仕方、考え方、それに関連する心理学の話、正しい情報の集め方、どういった人が成功するのかなどを学びましたが、これらはあくまで参考材料。各学年のエピソードで語ってきたように、学んだことを武器として使いつつもそればかりに頼るのではなく、とにかく考えて考えて自分なりの答えを出そうと奮闘してきました。この力は、ビジネスにかかわらず社会のどの分野においても求められる、自分なりの最適解を見つけ出すために必要な力です。自分だったらどうするか、こうアプローチを変えたらこういう答えに行きつけるはずだという思考をすることがとても大切なのです。

新一年生のみなさん、ここまで書いてきたように大学は今までの学び舎とは打って変わって、考えることに重きを置く学び舎です。急激に変わる勉学に戸惑いがあるかもしれませんが、ぜひ考えて考えて自分だけの答えを見つけることの楽しさを感じそして想像することに価値を見出してください。二、三年生の皆さん。入学した時ほどの大きい変化はないかもしれませんが、実際に企業に行って職業体験をするなどよりディープな題材を扱っていくことになると思います。そこからこれまでより深く物事を考えていくことになるでしょう。その一つ一つが成長の糧となりますので、どうか考えることをやめず自分なりの答えを導き出してください。四年生の方は本格的な就職活動が始まるかと思います。何がやりたいか、してみたか、できるかなど、これまでの自分を振り返りながら道を探してください。そして私と同じく新社会人となる方々。今まで学んだことや考えを発揮する時が来ました。私も懸命にこれまでの経験と知識を使って社会に乗り込もうと思いますので、一緒に頑張りましょう。



テレビ局インターンの記念写真



ゼミメンバーによる交流会

# すばらしい学びの時を共にしてー「メディア実践論」終章へ

#### 経営情報学部 客員教授 木村 知義

創刊準備号から数えて 25 号。学生たちが筆を執った 50 編すべての記事を読み返した。なんとすばらしい学生たちと時間を共にしてきたのだろうとこみ上げるものがあった。

学生たちの「メディア実践」の貴重な記録であることは言うまでもないが、それをはるかにこえて、このページには、学生たちの想いとともに私が学生たちから受け取ったかけがえのない「もの」が詰まっている。2008年以来、非常勤ながら教壇に立ち、学生たちと向き合い、共に歩んだ幸せをこのページを読み返しながらかみしめた。

本来は学生諸君によるメディアである「学生ジャーナル」に筆を執ることを許していただいたのは、私の出講に区切りをつける時が来てこのページも終章を迎えることになったからである。今は「産業社会特講」ーデジタル時代のメディア実践ーを掲げるページになっているが、元は、私が多摩大学の教壇に立つことになった時、講義科目である「現代メディア論」とあわせ担当することになった「プロジェクトゼミ」の「メディア実践論」という、ワークを軸に据えた学びを共にした学生たちの実践報告の場として始まったものだった。2011年秋、「学生ジャーナル」の創刊準備号から学生たちがかかわることになった。音声、映像に加え活字による表現をも複合した総合的なメディア実践という位置づけだった。

「メディアを創る」を掲げたプロジェクトゼミのスタート時は、まず音声メディアにおける発信を想定して企画、取材、制作に取り組んだ。メディアにおける表現は、なによりもそれぞれが「語ることば」を獲得し、鍛えることが原点だという考えにもとづくものだった。その積み重ねの上に、3年後、映像制作へと展開。情報の「発信者」として「誰もがメディアの主役になれる時代の挑戦」を掲げた。大学にあった手のひらに収まる小さなビデオカメラでその挑戦が始まった。

学生たちの「格闘」の数々が甦る。

自動車メーカーが箱根ターンパイクで開催するイベントを取材したいと言い出した学生がいた。しかし、取材申し込みは「見事に」断られた。あきらめきれない学生。「ロケ取材はできなくとも、イベントの現場に立って、そこで起きることを自分の眼で見ておきたい」と夜明けの箱根に駆けつけた。なんと学生の熱意に、現場で、企業から取材の許可が下りたのだった。

「マスメディアの取材クルーのテレビカメラとともに大学から借り出した小さなビデオカメラが並ぶという前代未聞の風景が出現」と感激を語り「思いをもってぶつかれば道はひらける」と綴った記事は共に学ぶ学生たちを大いに勇気づけた。

アニメの好きな学生が「夢に挑戦するアニメーターは、いま」という企画を立てた。取材の「お願い状」を書く勉強から始めたのだったが、学生がゼミ活動の一環で取材したいという要望を受け入れてくれる企業など簡単には見つからない。壁にぶつかるたび表情が暗くなっていく。ある朝の教室。「小学校の教師をしている母に、もうダメだって話したら叱られました。今どき、小学生だって自由学習で、自分で会社に交渉して見学に行っている。大学生のあなたにできないはずはないと言われてしまって…」ともらした学生には、すばらしいお母さんだねと喝采を送った。

「伝手も何もない 10 社以上のアニメ制作会社や数校の専門学校に『お願い状』を書く日々が続いた。挫折の連続で暗い気持にもなった。そんな時だった、『壁にぶつかることが大事なのだ。社会に出たら思うようにいかないことばかりの毎日だ。いま君はかけがえのない経験をしているのだ!』と木村先生から叱咤されたのは。そしてついに世界の手塚治が創設した「虫プロダクション」への取材の風穴があいたのだった。感動!続いて秋学期には「守れ!日本のアニメ ~日本のアニメ文化振興のために~」と題して文化庁

の担当者へのインタビューも実現した。何かを創るということは 壁にぶつかることなのだ、だから挫折は怖いものではないという ことを学んだ」とこのページに書き置いて社会に巣立って行った。

この教室で学んでネットメディアの世界に進んだ学生は、入社の翌月、5月にドイツ・ブランデンブルク門からのネット中継を担当した。いまもメディアの最前線で活躍する。昨年末、特別講義に招いて学生たちに話をしてもらった。「生まれて初めて海外へ」というところは笑いを誘ったが、「決して、多くの成功体験を語ることはできない。むしろ、戸惑いや自問自答の日々ばかり。『メディア実践論』の4年間を振り返った時に残る印象はこんな感じだ。しかし、もがき苦しんだ中にも、私が描きたい人達と真摯に向き合う楽しさを見いだせたからこそ、ここまで続けられたのだと思う」と書いてメディアの世界に飛び込んだ彼の原点がここにあった。当時は複数年履修が認められていて、このプロジェクトゼミに4年間も在籍した彼はみんなの学びをリードする役割も担った。学生たち同士で学びの空間を形作る理想の姿がそこにはあった。

言うまでもないが進路にメディアを志す学生のための教室ではない。社会や時代を見る目を鍛え、何かを発見し、それを企画としてまとめ上げる力を育むことを通して、社会に出て力強く生きる力を獲得しようという場であった。

学生たちの格闘を目にした先生方、学長室のみなさんが機材の整 備に特段の配慮をしてくださった。大学の財政が決して楽な状況 ではなかったはずの時である。しかし、若者言葉に倣うなら、こ れらの機材を「使い倒す」前に、世の中はスマホ万能の時代へと 大きな変容がはじまっていた。劇場上映作品がスマホで撮影され て世界に衝撃を与えた。教室でもここ2年はスマホによる動画制 作へと変わった。カリキュラム設定もプロジェクトゼミから講義 科目としての「産業社会特講」へと変わった。ただし、「メディア 実践」のワークを柱に据えるというプロジェクトゼミの精神は引 き継いだ。履修登録者が100人規模になって教室はにぎやかになっ たが、以前のように一人ひとりと向き合って、学生たちと語り合っ て学びを深めるということが難しくなった。しかしそれでも前号 のページに登場した2人のように、クリエイティブなチャレンジ 精神と人間としての温かさを持って成長を見せてくれた。メディ ア実践の核心は、何かを発見し企画する力を鍛えることだが、社 会への深い洞察と人間への共感こそがすべての原点であることを、 2人の文章が物語っている。

こうして書いていると学生諸君の顔が、姿が目に浮かんで際限 がない。

このページの終章に際して、学生諸君とこれほど充実した時間 と空間を共にし、共に歩んだ幸せを刻んでおきたいと思った。



2014年プロジェクトゼミ「メディア実践論」教室風景



キャンパスでカメラ実習 2017 年春



プロジェクトゼミ 2016 年の教室



産業社会特講 2018 年の教室

## 自分が全く何もない状態でも頼れる人~4年間でのかけがえのない出会い~

### グローバルスタディーズ学部4年 森川 和洋

インターゼミ(社会工学研究会)の初回の講義で、毎年寺島実郎 学長から2つのアセットマップ(資産図)のお話があります。紙 に2つのアセットマップを書いてみるというものです。1つ目は、 スキル、自分の強みについてです。2つ目は、自分が全く何もない 状態でも頼れる人の名前です。人脈やネットワークと置き換えても 良いかもしれません。自分が全く何もない状態というのは、仕事が ない、お金がないという状態を想定した時というものです。今回の 学生ジャーナルを書くにあたり、この、自分が何もない状態でも頼 れる人に出会えた4年間を軸にして書いていこうと思います。

私は、23歳で多摩大学へ入学しました。日本の高校を中退し、オー ストラリアの語学学校、専門学校に通いました。数々のアルバイ トでお金を貯めて、多摩大学でお世話になることになりました。1 年生時は、勉強しようと志して入学しましたので多くの時間を勉 強に費やしました。周りの多くは、10代の学生です。価値観や姿 勢といった観点からも、かなり浮いていたように思います。1人は 寂しいものでした。沢山色々な学生に積極的に話しかけましたが、 アセットマップに書けるような人間関係は作れませんでした。相 談出来る先生もいませんでしたので、学校のカウンセラーを利用 したりもしました。日本でカウンセラーを利用することは、ネガ ティブなイメージがあるようですが、世界的にみたらカウンセラー は誰もが利用するものです。無料ですので利用してみてください。 多摩大学の学生は、本当に多くの悩みを抱えています。4年生にな り私に多くの学生が相談しにきてくれます。

2年生に入ると履修出来る授業は増えます。1年生より確実に学 校が楽しくなります。1年生時の AEP(アカデミック・イングリッ シュ・プログラム、英語集中教育)が自分に合わないと思う学生も、 大きく環境が変わります。大丈夫です。1年が過ぎると、安田震一 学部長、先生方、職員の方々に顔をだんだんと覚えてもらい、よく 声をかけて頂きました。ありがたいことです。本当に救われました。 複数の先生方に、悩みを聞いてもらい、ある先生は、自分のプライ ベートの時間を割いて私に向き合ってくださいました。また、2年 生時から、毎週土曜日九段下寺島文庫3階の多摩大学九段サテラ イトで開講している寺島実郎学長のゼミナール、インターゼミ(社 会工学研究会) にも参加しました。インターゼミとは、経営情報 学部・グローバルスタディーズ学部の2学部と社会人大学院生お よび卒業生、修了生を含めた約40人を4つ、5つ(毎年変わります) のチームに分け、それぞれ 1 年間の研究テーマを決め、文献研究 とフィールドワークでチームとして論文を1本書きあげるゼミの ことです。この年は、サービス・エンターテインメント班に入り、 多くの出会い、学びがありました。

3年生になり、台湾の南投県に位置する国立暨南国際大学へ1 年間交換留学しました。経営情報学部・グローバルスタディーズ 学部の先生方は、アジア関係の研究をされている方が多数いらっ しゃいます。寺島学長、安田学部長も今後の日本を考える上での アジア地域の重要性を、口をそろえておっしゃっていました。中 国語を学びたいのは勿論、先生方の影響もあり台湾への留学を決 めました。ここでも、幸いなことに貴重な体験をさせて頂きました。 ある多摩大学の先生の台湾でのフィールドワークにご一緒させて 頂き、一生忘れることの出来ない思い出となりました。多摩大学の 学生には、是非東アジアへ留学してほしいと思います。日本と関 係のない東アジア地域はまずないと言えます。英語、中国語が出 来なくても行ってみてください。行ってなにも出来なかった、で 良いんです。出会い、学びがゼロということは絶対にありません。 飛行機に乗る際に、必ず誰かと出会います。

4年生の間は、ほとんどが就職活動でした。理不尽な会社、人事 の悪口を何度も先生方の研究室で聞いてもらったものです。イン

ターゼミにも復帰しました。これは、寺島学長が言われていたそ うなのですが、「最低2年間続けてインターゼミが分かってくる」 だそうです。この年は、アジアダイナミズム班に入りました。フィー ルドワークでは、インターゼミ 10 年目で初の海外でのフィールド ワークにも参加させて頂きました。私の4年生時(2018年度春 学期)から、湘南キャンパスで寺島実郎監修リレー講座のライブ ビューイングが始まり、授業として開講されました。毎回は参加 できませんでしたが、多くの学びがありました。一般では12回で 12,000円の公開講座が、授業として、しかも専門科目として扱わ れます(2019年3月現在)。

アセットマップの自分が全く何もない状態でも頼れる人の話に 戻ります。ここで、そんな人が何人も出来ましたと言えば嘘にな ります。ですが、そんな人が多摩大学での4年間を通じて数人で きました。本当に幸せなことです。多摩大学の先生方の中には、 学生を見捨てず最後まで向き合ってくれる先生方がいます。私は 多摩大学に入学するまで、過去の経験から大人が大嫌いでしたし、 特に先生は大嫌いでした。適当な無責任な先生とはたくさん出会っ てきました。しかし、多摩大学での4年間を通して、その考え方 が少し変わりました。

最後に後輩へのメッセージとしましては、「誰かに助けを求めて ください」ということです。困っていなくてもです。1人で生きて いけることは、絶対にありません。先程も述べましたように、多 摩大学には、多くの困難や不安を抱えている学生がいます。SOS を出せば必ずその SOS を拾ってくれる人がいます。必ずです。

最後にこの場をお借りしまして、執筆の機会を与えてくださっ た安田震一学部長、4年間お世話になりました先生方、職員の方々、 管理員さん、皆様に改めて御礼を申し上げます。誠にありがとう ございました。



2016年度インターゼミサービス・エンターテインメント班様子



交換留学先の台湾国立暨南国際大学での授業の集合 写真。日本人は私のみ。他台湾人、香港人、澳門人



2年前2016年にインドネシア・ビ ヌス大学から多摩大学グローバルス タディーズ学部へ交換留学したスタ ントジョルディさん。帰国後、再度 日本を訪れ 2018 年に再会しました





2018年度インターゼミアジアダイナミズム班様子



2018年12月8日に多摩キャン パスで行われたアクティブラーニ ング発表祭。インターゼミアジア ダイナミズム班として参加

# 多摩大学経営情報学部学生会執行部 ~活動紹介~

#### 経営情報学部学生会執行部 部長 2 年 田島 凜太郎

#### 2018 年度学生会執行部部長の振り返り

2018年度は新入生へのサークル合同説明会から始まり、バーベキューパーティーなどの行事を開催することで、多くの学生に学生会を認知して頂けたと思います。また、留学生歓迎会、送別会の開催では、多摩大学に留学をしてきた海外の学生ともたくさん交流を深めることができました。

サークル活動については、昨年度と比較して多くの新規準公認サークルが設立されました。それは、学生会で開催したサークル設立説明会により、新規サークルの設立方法を多くの学生に知って頂けた効果だと思います。もともと、多くの学生からサークルの数が少ないという要望が出ていたので、学生会としては学生の要望に応えられたことをとてもうれしく思います。

私は今年度、2年生という立場で学内を管理するにはあまりにも早い学年での就任でしたが、同級生の仲間や先輩方の助けにより、 多くの有意義な活動することができました。まだまだ、学生の要望に応えるためには足りない部分も多々ありますが、私なりに一生 懸命活動することができたと感じています。心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

#### 2018年度学生会活動一覧

- ・新入生向けサークル合同説明会
- · 春学期私費交換留学生歓迎会
- · 春学期交換留学生送別会
- · 秋学期交換留学生歓迎会
- · 秋学期交換留学生送別会
- ・バーベキューパティー
- ・サークル設立説明会
- ・学内学外清掃活動
- 七夕装飾
- ・チャレンジウォーキングの運営フォロー
- ・大学職員との学生満足度調査に関する フィードバック会議の実施
- ・ハロウィン装飾
- ・毎月1回学生執行部会
- · 毎月1回学生会総会
- ・卒業のつどいパーティー運営

新入生向けサークル合同説明会



学内学外清掃活動



十夕



私費交換留学生歓迎会



交換留学生送別会



バーベキューパーティー

#### 2018 年度新たに設立したサークル

- ・いーすぽサークル
- ・珈琲研究会
- ・アニメ・映画研究会

- · Bere festa (フットサル)
- ・韓国文化研究会
- ・多摩学生研究団体トラベルデザインズ

#### 2019年度学生会執行部部長の意気込み、実現したいことなど

2019 年度も引き続き学生会執行部長を務めさせて頂くことになりました。2 年目ということもあり、2018 年度に経験したことを踏まえて、より一層学生からの要望を取り入れて活動していきたいと思っています。サークルについては、さらに多く設立されるよう、設立に関してのより分かりやすい説明会を数多く開催するなどして、この多摩キャンパスをもっと活気のある雰囲気に作り上げていけたらと思います。また、2018 年度できなかった行事や四季に合わせたイベントなどをもっと増やし、学生が季節の移り変わりをよりこのキャンパス内で感じることができるように工夫していきたいと思います。

私一人ではまだまだ力不足ですが、学生会役員や多くの学生と共に多摩キャンパスを学生の過ごしやすい場にしていきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。